

松会の宗教史・民俗史：近世における神仏習合的祭礼の実像と近代における修験霊山の表象

山口, 正博

<https://hdl.handle.net/2324/1455994>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 山口 正博

論文題名 : 松会の宗教史・民俗史—近世における神仏習合的祭礼の実像と近代における修験霊山の表象—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は近代以前の英彦山を中心とする修験寺院の組織・儀礼・思想に関する実態を究明する第一部「英彦山修験道の宗教史・民俗史」と、近代以降に英彦山修験道が解体されて旧修験寺院の事物が脱文脈化・再文脈化されていく変遷を概観する第二部「北部九州における修験道の近代」から構成されている。

第一部序章では松会の前提として、執行者である英彦山山伏の九州内での位置づけと松会の前段階の行事である潮井採りの概観を行った。英彦山派は九州では本山派・当山派と並んで九州内の山伏の勢力を三分していた。各派の山伏の分布と合わせて英彦山での檀那場の等級を照らして地域ごとの英彦山とのかかわりを考察した。また、潮井採りは今日でも道中の集落が一行を歓待する習わしがあり、その創始は松会成立よりはやや遅れるが、海岸での修行など英彦山修験道の古層と関わりのある地が選ばれているようである。

第一章では松会という祭礼が英彦山でいかに成立したのかを考察した。松会は旧暦二月十四・十五日に行われ、柱松の頂での幣切・田遊び・神幸・風流（獅子舞や剣舞などの芸能）の四つの構成要素からなる。各要素には松会の成立以前に遡れる三つの系譜がある。ひとつは十三世紀初頭からの舍利会の系譜を引く法会系儀礼群、次に法会に出仕していた芸能者集団の実践の系譜を引く芸能者集団系儀礼群、最後に彦山独自に展開した修験道儀礼の系譜を引く柱松 - 峰入り系儀礼群に分けられる。前二者は中世の一般的な寺社祭礼とも共通するものであるが、後者は彦山における峰入りの整備とも密接に連動している。松会が柱松を中心に構築されたということは、その成立は中世における彦山修験道の確立と表裏一体をなしているのである。

第二章では松会を成立させる契機となった柱松を取り上げた。修験寺院の柱松は松会以外では信越の戸隠・妙高・小菅と紀伊の粉河寺が知られている。これらを比較する中で共通する実践形態を抽出した。特に中世で途絶えた粉河寺のものはこの種の儀礼の原型を知るのに適している。さらには南北朝期に大峰山の峰入りに際して柱松儀礼が行われたことがうかがえ、各地でこれを取り入れた修験寺院があったという前史を推測した。しかし、粉河寺の儀礼は失敗の危険性が非常に高いものであり、松会の柱松とは大きな差異がある。このことから英彦山ではこの儀礼を失敗の危険性を下げようとした洗練化によって独自に展開したことがうかがえる。それが松会の成立・展開へとつながったのである。

第三章では松会が伝播していった経路に関する考察を行った。松会は英彦山・求菩提山・松尾山・等覚寺・檜原山・蔵持山といった豊前の修験寺院に行われていたため、まずは中世には英彦山と匹敵する規模だった求菩提山への伝播の可能性を山内組織の比較や峰中修行への連動といった松会執行の前提となる組織的基盤をもとに行った。次に英彦山と他の山で決定的に異なっている田遊びの芸能、とりわけ孕み女・牛という演者の考察を行い、求菩提山・松尾山・檜原山・等覚寺が同系統

で、それとは英彦山が別系統であることを明らかにした。また、前四者は小規模寺院もあり、求菩提山に伝わった時点で松会が小規模組織でも執行できるような簡素なパッケージ化（脱文脈化）がなされ、受容する側の事情によって実践の文脈が変化しえるということも指摘している。

第四章では近世英彦山の九種類の当役を行者方・衆徒方・惣方の山内組織がどのように担当していたのかに関して、約三〇〇年間の記録を一覧し一定の規則性を見出すことができた。すると、各組織に昇進に必要な通過儀礼の機能を持つ主当役と、それとは別に昇進とは関係のない副当役があるという当役の二層構造が存在したことが明らかとなった。

第五章では松会の中心的な要素である御田祭に関して幕末の実践の実態を明らかにするために、執行者の名簿からどのような役が存在したのかを検証した。また明治期の御田祭の記録から修験道時代の実態を推論した。さらに、英彦山霊仙寺が英彦山神社となったことで忘却された修験道時代の御田祭をめぐる説話から、御田祭をめぐる世界観を抽出した。今日とは御田祭の祭神がシフトしているが、そこには近代神社史が反映されているのである。

第六章では松会の名の由来ともなった柱松を中世・近世の実践の実態を明らかにした。松会の多くの要素が惣方中心なのに対し、幣切だけは先達より上位の大越家が担当する重要なものであったことを明らかにした。それゆえ、柱松は印信や著述によって言及され、宗教的世界観が結び付けられて語られており、実践や世界観の流通には階層性が存在したことがわかる。

第七章では近世英彦山において上級の山伏たちは印信を通じて思想や加持祈祷の実践方法に関する知識の伝授を行っていた。それに加えて、稀に出る傑出した山伏が思想を著述として残す場合もあった。これらの奥書にある授受の履歴を基に修験道における知識の伝授の問題を考察した。今日の修験道思想研究が明らかにしたような全体性を有する視点は、近世の山伏が修行を重ねる過程で知識を習得して獲得したであろう認識とは似て非なるものなのである。

第八章では民衆の英彦山に対する態度を推測した。近世英彦山での参詣習俗の実態には山伏個人と檀家・講中との信頼関係・絆とも言い換えられるものもあった。そうした関係が揺らぐ可能性もあることを幕末に熊本藩に捕縛された山伏に対する尋問記録から考察した。そこでは狐を憑けた祈祷が問題とされていたが、「呪術」の否定というよりも、世間を騒がせたことが問題とされており、近代以降の「淫祠邪教」視とはやや異なる認識が存在したのである。

第二部序章では明治の神仏分離や廃仏毀釈が九州の修験道に与えた影響の大きさを概観した。英彦山派の多くは神社となり、檜原山だけが天台宗に帰入した。他派には教派神道に転じたり、廃絶して行事だけが民俗として残ることもあった。次に松会をめぐる先行研究を概観した。その多くは民俗学・郷土史的なものであるが、各山の松会がいつ頃着目されたのかという表象の歴史として扱うことで、こうした研究が発生した社会的背景の存在が浮かび上がってくるのである。

第九章では昭和初頭に新聞社主催の「日本新八景」選定の紙上イベントが各地の風景地を媒介として郷土意識を醸成し、後の国立公園指定運動へと継承された。この過程で各地の歴史や民俗が再発見され郷土研究・民俗学が受容される素地を作ったことを英彦山・求菩提山の事例から検証した。

第一〇章では明治以降衰退の一途をたどった求菩提山が昭和初期に英彦山と連携して国立公園指定運動を展開する。そのなかで、地元の築上新聞を中心に求菩提山の自然や歴史・民俗が再発見され資源化されていく。しかし、それは旧来の求菩提山信仰の復活ではなく、新たな価値の下で脱文脈化を経た創造であった。

終章では昭和初頭に芽生えた修験道の再発見がその特色である身体性にも及び、修験道の峰入りを軍隊的行軍の理想像とするなど戦時下の国民の精神・身体的理想像として位置づけられるに至った。こうした特殊な文脈で修験道への関心が高まった時代に、今日の修験道研究の原点ともいえる古典的研究書が刊行されている。そこには学問成立の社会的背景への考慮の必要性も存在する。